

聖書学における故トーレー博士の貢献

高 橋 虔

トーレー博士については1966年に聖書雑誌8月号に執筆したが、ここではさらに詳しく述べることにした。

トーレー博士 (The late Dr. Charles Cutler Torrey) は1863年12月20日に米国バーモント州イースト・ハードウィック (East Hardwick) に生れ、1956年11月12日に93歳の生涯を終えられた。幼時より会衆派の教会に属し、1884年にメイン州ブランズウィックのボードイン大学 (Bowdoin College) を卒業後、1年間母校でラテン語を教え、その後アンドーバー神学校に入学して1889年に卒業、さらに渡欧してストラスブルク大学に入り、1892年 Ph. D. の学位を得られた。その時の論文はマホメット教のコーランについての研究で、それは *The Commercial-Theological Terms in the Koran* と題して1892年にオランダのライデンで出版されている。その後も同博士はマホメット教についての論文を書き、1901年には *Biblical and Semitic Studies* 誌に *A translation of Ibn 'Abad-al-Hakim's "Mohammedan Conquest of Egypt and North Africa in the years 643 to 705 A. D."* を掲載した。単行本としては *Mysticism in Islam*, 1921. *The Futuh Misr of Ibn' Abad al-Hakim*, 1922. *The Jewish Foundation of Islam*, 1933. がある。この後の著作によれば、コーラン経の大部分はユダヤ教側から出たもので、マホメットがユダヤ教の教師たちから聞いたことを述べたものであるというのである。キリスト教に関する部分もユダヤ人から伝えられたものと見ており、これらのユダヤ人は紀元前6世紀にアラビアの Hijaz に移住したユダヤ人の商人の子孫であろうと考えている。新バビロニア王国の最後の王ナボニダス (Nabonidus, 556-538 B. C.) の離宮のあったテイマ (Teima) 付近にもユダヤ人がいたと言われている。トーレー博士によれば、マホメットは決して

無学の人ではなく、自己催眠の術を心得えており、その状態において彼のメッセージを伝えたものとしている (cf. G. Parrinder, *Jesus in the Qur'an*, 1965, p. 160)。なおコーラン経の英訳についてのトローレー博士の書評は1917年のハーヴァード大学神学評論誌に出されている (*The Holy Qur'an, with English Translation and Explanatory Notes. Part I*, 1915, HTR. 10, 1917, pp. 382-387)。1898年には *Journal of Biblical Literature* 誌にマラキ書とエドム人についての小論を発表した (*The Prophecy of "Malachi"; The Edomites in the Southern Judah*. JBL. 17, 1878. pp. 1-16, 16-20)。後の論文においてはエドム人の移住のことを論じ、それによれば紀元前7世紀にナバテヤ人が北隣のエドム人の地に侵入したので、エドム人はさらに北方の南ユダの地に移住し、第6世紀の初め頃、バビロニヤ人がユダに侵入して来たので、エドム人はその時の混乱を利用して「南の地(ネゲブ)および平野(シェフェラー)」(ゼカリヤ7・7)に住みついたというのである。この侵入はゼカリヤの時代(前518年)またそれに近い後の時代のこととされている。それ以来エドムとイスラエルとは長く敵対関係に立つようになったと説明している(詩137・7, イザ34・5以下, 63・1以下, アモス9・12, オバデヤ, マラキ1・1—5等参照)。前者の論文においては、マラキ書全体についてこれを論じその全体的な思想や構造に言及している。マラキ書はペルシャ時代に書かれたもので(1・8には「総督」の語がある)、それは第二神殿再建後のことで、紀元前四世紀の前半の時代に当るとしている。

トローレー博士は旧約宗教学の G. F. Moore, 旧約考古学の W. F. Albright と相ならんで旧約言語学の先達であったということができよう。博士は Wellhausen と同様に晩年は旧約学より一時離れて、新約の諸書(4福音書, 使徒行伝15・35まで, ヨハネ黙示録)が元来アラム語で書かれた文書であるという説を次々に発表し、聖書学界に多くの衝撃を与え、今日でもその波紋はまだ終結に達せず、それぞれの方面において一層詳細にまた全般的に論ぜられるようになっていく(このことは Matthew Black, *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*. 2 ed. 1954. Klaus Beyer, *Semitische Syntax im Neuen Testament*. Band I 1962. Wax Wilcox, *The Semitisms of Acts*. 1965. を一読すればすぐわかることである)。筆者が始めて同博士にお目にかかったのは1930年(昭和

5年)と記憶するが、その時エール大学で博士よりシリヤ語やアラム語を学ぶことになったからである。博士の履歴によれば、1892年にストラスブルク大学での業を終えてから、1900年まで母校のアンダーバー神学校でヘブル語その他のセム語の講師として働かれ、1900年から1932年の引退の時まで32年間エール大学におられたのである。その間1900年にはパレスチナにおける American School of Oriental Research を創立して1年間その主任となり、Journal of American Oriental Society の編集者の1人として活動されたこともある。筆者が始めてトーレー博士の名を知ったのは、大正の終り頃同志社に在学中の頃で、その時聖書学のカーブ教授(E. S. Cobb)からアラム語研究の文献の1つとしてトーレー博士の論文 The Translation made from the Original Aramaic Gospels 1912 を紹介された時に始まる。この論文はハーバードの C. H. Toy 教授に献呈された論文集の1つで(表題は Studies in the History of Religion, Presented to C. H. Toy, 1912), それはトーレー博士の後年の諸研究の出発点をなしたとも見られる論文である。この論文において、著者は New Testament Greek または Biblical Greek と言われるような、70人訳をまねた特別のギリシヤ語は存在せず、それはまた通俗ギリシヤ語(コイナー)の一種と見られることもあるが、福音書、使徒行伝、黙示録に示されているギリシヤ語は translation Greek と呼ばるべきものであることを強調して、その実例としてラテン語とフランス語を直訳した英訳の例を挙げている。翻訳的ギリシヤ語と言われるものの背後にあるものは、アラム語またはヘブル語であるが、著者によればそのことをつきとめる方法は直訳と誤訳とを指摘する方法によると考えている。この点において著者はヴェルハウゼンの福音書に関する諸注解を高く評価している(Wellhausen's Approach to the Aramaic Gospels, in the DMG, 101, 1951, pp. 123-37)。ルカによる福音書においては翻訳の事実が最もよく見られるとして、ルカ1・5-10, 1・74, 75のヘブル語原文と思われるものを示し、またルカ福音書に伝えられている主の祈りのアラム語原文を試作している(cf. A possible metrical Original of the the Lord's Prayer, ZA 28, 1914, pp. 312-317)。その他ルカ福音書における誤訳と見られるものを例示しているが、その中には次のようなものがある。1・39の「ユダの町に」は「ユダという町に」とも訳さるべきギ

リシヤ語であるが、このアラム語原語は「ユダヤの州に (To the province of Judea)」とすべきものであると論じているが、この議論には取るべき所が多い。日本語でも「ユダの町」は「ユダという町」の意か、「ユダ(ナ) (地方?)」にある一つの町」か、その辺が不明確である(英語でも a town of Judah, a town in Judah など余りはっきりしない。なお Torrey, Medina and *ΠΟΛΙΣ*, and Luke 1:39, HTR, 17, 1924. pp. 83-91 参照)。著者によれば、第2マッカビー書の著者が、その冒頭の、ヤソンやネヘミヤに関する手紙の部分(1:1—2:18)をアラム語の文献から自分で翻訳したように、ルカはキリスト幼時の物語りを自ら翻訳したというのである。ついでに言及するが、第2マッカビー書の初めの 1:1—2, 18の部分は通常二つの手紙より成ると見られており(1:1—10 a, 1:10 b—2:18), J. Moffatt (R. H. Charles 編の *The Apocrypha and Pseudepigrapha*. Vol. I. 1913) によれば、この2つの手紙はヘブル語から訳されたと見る学者もあり (Schlünkes は第1の手紙だけ, Ewald は第2だけ, Grätz, Brüll, Torrey は両方とも), そしてトーレー(以下敬称略)はその原文をアラム語と見ているのである (II Maccabees, in the *Encyclopaedia Biblica*. なおトーレーの *Die Briefe 2 Makk.* 1: 1-2: 18, in *Z A W.* 20, 1900, pp. 225-242; *The Letters prefixed to Second Maccabees*. *JAOS.*, 1940, pp. 110-150 参照)。その他福音書における興味ある例を挙げるなら、ルカ11:41の句「ただその中にあるものを施しなさい」は、ヴェルハウゼンの有名な修正で、現行口語訳にも採用されているもの(アラム語からの誤訳によるものとして)、すなわちマタイ23:25と比較して「内側にあるものをきよめなさい」と修正するのであるが、トーレーはこの原文はアラビア語の意味をとり入れた訳であるとし、これは11:39に対比して言われたイエスの語として、「内側にあるものを正しくしなさい」(Make righteous that which is within)の意に解すべきであると主張する。

なおマルコ12:4の「その頭をなぐって」の原語は珍しいギリシヤ語であって、他の文献には余り見られない語であるが、さらにその正確な綴りについては古い写本の間に2つに分れている。それは *ἐκεφαλαίωσαν* (*κεφαλαίωω*) と *ἐκεφαλίσωσαν* (*κεφαλίσωω*) であって、前者は Westcott-Hort, Swete, Souter, Taylor 等によって採用され、後者は Nestle および *The Greek N. T.* (1966) その他

New English Bible の底本のギリシャ語新約に採用されている。この語が他のギリシャ語文献に出ている場合には to sum up の意に用いられているのであるが(ἀνακεφαλαιώω, to recapitulate, ロマ13・9, エペ1・10参照), ここでは「頭に傷を負わせる」という新約独特の意味に用いられている。(口語訳の「頭をなぐって侮辱した」はイエスの頭をたたいて侮辱したローマの兵士のことを連想させ、必ずしも原意に忠実ではない)。そのためこの語の背後には何かアラム語の存在があるのではないかとされている(W. C. Allen, Mark, 1915. The Oxford Church Biblical Commentary)。また別にこの語は ἐκολαφίσαν (they buffeted) の誤りであろうという説が Baljon によって提唱され、Lagrange はその説を斥けているが、Burkitt はそれに賛成し (AJT, 1911, p. 173 ff.), トーレーもこの論文においてこの説を支持している。いずれにせよ、新約においてこのような独特な語が出てくる場合には徹底的にそれを調べる必要があり、その背後にセム語の文献または伝承を仮定することもあり得るのである。

福音書のアラム語原本説については、以前 J. G. Eichhorn (Die allgem. Bibliothek der bibl. Lit. V. p. 759 ff., 1794; Einl. in das N. T. I. 1804, 1820) もアラム語原始福音書説を提唱し、その後 J. T. Marshall (British Expositor, 1891, 92), A. Resch (Aussercanonische Paralleltex-te zu den Evangelien. 1895—ヘブル語の原始福音書の存在を説く)なども同様の説を述べ、トーレーの説は彼らの研究の発展とも見られている。トーレーはその後、前述の福音書翻訳説を各論的に立証するため、まずアラム語原本の存在を仮定する立場から四福音全体の英語私訳を發表し (The Four Gospels. A New Translation. 1933), 次にその論拠(主として誤訳と見られるものの説明)を示した試論を世に問うた (Our Translated Gospels. 1936)。この二書はトーレーの翻訳福音書論を全般的に示したもので注意すべき著作であるが、特に後者の序文において、旧約のメシヤ観を述べて、その発展としての福音書著作の目的について全体的の大観を与えている。それによれば、旧約のメシヤ観は漠然たるものではなくその内容も明らかであって、メシヤは単なる人間ではなく、神的人物であって (イザヤ9・6には「大能の神」とさえ言われている)、それはダビデの子たる王として、また擬人化されたイスラエルとして認められている者であるが、第2イザヤが述べているよう

に、それは政治的な征服者ではなく、どこまでも精神的指導者であって、他人の罪を負う苦悩の僕で、時が来ればイスラエルは解放され、神御自身が敵対する異邦人を滅ぼして、全世界はこのメシヤに服属し、新天新地が実現するというのである。このメシヤ観は「ソロモンの詩篇」の中にも明白に示され、新約の福音書はナザレのイエスがこのメシヤであることを宣言した文書に外ならないとするのである（なお“Outcroppings of the Jewish Messianic Hope”. 1928 参照）。トーレーによれば、福音書で「キリスト」と言われる場合、それは固有名詞ではなく、メシヤの意であるとして、Jesus Christ を Jesus the Messiah と訳している（マタイ 1・1、マルコ 1・1、ヨハネ 1・17、17・3。マタイ 1・18の「イエス・キリスト」では、イエスを除いて the Messiah だけを残し、16・21では、キリストを除いてイエスだけを残している——この点 New English Bible も同じ）。またルカ 2・11の「主なるキリスト」は 2・26の「主のキリスト」（神のメシヤ——口語訳には「主のつかわず教主」とある）と同様に「主のメシヤ」と訳すべきであると主張している。トーレーの前書について J. A. Montgomery (Torrey's Aramaic Gospels, JBL. 53, 1934, pp. 79-99) は次のように述べている。Dr. Torrey's most recent book, *The Four Gospels, A New Translation* (1933) is in its completeness a revolutionary, if not, catastrophic, contribution to N.T. studies (p. 79). This book is the deposit of a long and intense and, I would add, devoted study of the Gospels. It is a fresh blast of “the spirit” blowing into the somewhat heavy atmosphere of a closed circle (p. 98). Enno Littmann (Torreys Buch über die vier Evangelien. ZNT. 34, 1935, pp. 20-34) もトーレーの前の書を紹介して大体において賛意を表し、その初めに次の如く述べている。Mit seinem Buche “The Four Gospels” hat C. C. Torrey gewissermassen eine lange mühsame, entsagungsvolle und gründliche Lebensarbeit gekrönt.

トーレーによれば、四福音書のアラム語原本は皆紀元60年以前に書かれたもので、ルカ 1・1—4、3・1はルカ自身がギリシヤ語で書いたものであり、またヨハネの福音書は比較的遅く訳され（恐らくエペソで）、その第21章はその時つけ加えられたギリシヤ語の著作であると見ている。ルカの福音書はパウロがカ

イザリヤで入獄していた頃、ルカがイエスについてのセム語の諸文書を集めたものと見ているのである。1934年の12月にニューヨークで開かれた聖書学会において、トーレーは、四福音書が紀元50年以後に確かに書かれたという証拠を1つでも示してほしいと、列席の新約学者に求めたが、誰もそれを示し得なかったと述べている。現在までトーレーのこの大胆な提案またその1つ1つの誤訳その他の例示について部分的の賛成また全面的の反対が続いているが、新約聖書における Semitism の問題はようやく全般的に論じ始められているという現状であろう。福音書の背後にあるアラム語と言っても、今日知られているアラム語には、その歴史的時代の前後により、また書かれた地方によって、少しづつ相違があり、トーレーは福音書のアラム語は旧約のアラム語と接近しており、タルグムやラビの文書におけるアラム語とは少し離れているというのである。「誤訳」と言われる場合でも、それはアラム語またはギリシヤ語についての訳者の知識が不完全というのではなく、経典としての原文を出来るだけ忠実に訳そうとしたためであって、その証拠として、ルカ福音書の初めの序文は優れたギリシヤ語の文体であるが 1・5 以下は翻訳調の直訳的な文章が始まるというのである。この点において「アラム語で考え、ギリシヤ語で書いた」という説や、ギリシヤ語に精通しなかった者の著作、または故意に70人訳に似せた作文というような諸説と区別するべきものである。70人訳の場合でも、その文法を無視した構文 (solecism と言われる) は必ずしもその訳者がギリシヤ語に精通していなかった証拠とはならないというのである(たとえば、民数記 9・10 の 'ish 'ish —誰でも—を70人訳において *ἄνθρωπος ἄνθρωπος* と直訳されていることなど)。

トーレーのこの新説については W. F. Albright (From the Stone Age to Christianity, 1940, 1957, pp. 382-385) も述べているように、学界に大いなる波紋を生じ、学者の説は賛否両論に分れた。E. J. Goodspeed, D. W. Riddle (The Aramaic Gospels and the Synoptic Problem. JBL. LIV. 1935, pp. 127-38) などは強くこの説に反対し、H.F.D. Sparks は、福音書および使徒行伝の Semitism は Septuagintalism であり、ルカは Septuagintalizer であると主張した (The Semitisms of St. Luke's Gospel, JTS. xliv. 1943. pp. 129-38; The Semitisms of

the Acts, JTS. 1950, pp. 16-28; see C. K. Barrett, Luke the Historian in Recent Study. 1960. p. 16. n. 15)。これに反して Ralph Marcus (HTR. XXVII. 1934, pp. 211-39. この論文に対してトーレーの次の論文がある “Professor Marcus on the Aramaic Gospels. JBL. LIV. 1935, pp. 17-28), J. de Zwan (John wrote in Aramaic. JBL. LVII. 1938, pp. 155-71), J. Ropes (The Synoptic Gospels. 1934, 1960², pp. 96-100.), E. Littmann (Torreys Buch über die vier Evangelien. 2 NW. 1935, pp. 20-34), J. T. Hudson (The Aramaic of St. Mark. Ex. T. May, 1943, pp. 264 ff.) 等は個々の事例についての異説を述べているが、大体においてこれに賛意を表している。ただし Albright は自分の立場は *intermediate position* であると言い、トーレーの貢献については次のように述べている、*The present writer believes that Torrey has demonstrated the existence of a much more important and much more far-reaching Aramaic substratum of our Greek Gospels than had been believed previously by any first-class scholar (op. cit. p. 385)*。しかし *The Archaeology of Palestine. 1949, 1956, p. 203* にはアラム語の福音書があった訳ではなく、アラム語の口伝を基礎としてギリシヤ語の福音書が書かれたものと見ている。G. F. Moore (*Judaism I. 1927*) は明かにトーレーの著書に言及することはしていないが、福音書および使徒行伝の前半がアラム語よりの翻訳であることを認めている (*The Greek in which the Synoptic Gospels have come down to us bears in itself unmistakable evidence of translation from Aramaic. p. 184. There is no reason to doubt that the original language (the Didache) was Greek; not, like the primitive Gospel or the first part of Acts, Aramaic. p. 189*)。Vincent Taylor (*The Gospel acc. to St. Mark. 1957, p. 56*) も中立的で次のように述べている。We have very good reason to speak of an Aramaic background to the Greek of the Gospel; there are grounds for suspecting the existence of Aramaic sources, which may, however, be oral; and we can speak of the Evangelist's use of a tradition which ultimately is Aramaic; but to say more is speculation。ヨハネ福音書のアラム語資料税については、R. Bultmann はその注解 (*Das Evangelium des Johannes. 1955, pp. 559 f.*) において、2つの資料 *Redenquelle (RQ)* と *σημεία Quelle (SQ)*

奇蹟談の集成)の存在を主張し、その中の RQ の原語はアラム語またはシリヤ語であると考えている。Die Hypothese, die vor allem durch Burney vertreten wird, dass das JohEvg als ganzes eine aus dem Aramäischem ins Griechische übersetzte Schrift sei, lässt sich m. E. nur für die Quelle, die dem Prolog und den Jesus-Reden des Evgz zugrunde liegt, aufrecht erhalten. (S. 5).

ヨハネ福音書のアラム語資料の問題については A. Schlatter (Die Sprache und Heimat des vierten Evangelisten. 1902; Der Evangelist Johannes, 1930)がこの福音書のギリシヤ語のセム語的特性を指摘し、後 C. J. Ball (Had the Fourth Gospel an Aramaic Archetype? Expository Times, 21, 1909-10, pp. 91-93), C. F. Burney (The Aramaic Origin of the Fourth Gospel. 1922), J. M. Montgomery (The Origin of the Gospel acc. to St. John. 1923) がアラム語の背景を強調し、Wm Manson (The Incarnate Glory. 1923), Vocher Burch (The Structure and Message of the Fourth Gospel. 1928) 等は Burney の説に賛意を表していたが、トーレーはさらに一步を進めてこの問題の核心にふみ込んだ訳である (The Aramaic Origin of the Gospel of John. HTR. 16, 1923, pp. 305-344; The Date of the Crucifixion acc. to the Fourth Gospel, JBL. 50, 1931, pp. 227-241; "When I am lifted up from the Earth. John 12, 32, JBL. 51, 1932, pp. 320-322; —アラム原文を仮定して When I shall depart from the Land の意と解する)。これに対して M. Burrows が2つの論文で批評を加えているが (The Johannine Prologue as Aramaic Verses, JBL. 1926, pp. 57-69; Original Language of the Gospel of John. JBL. 49, 1930, pp. 95-139), Burney も Torrey も少し行き過ぎているというのがその批評であり、Burrows 自身、福音書の翻訳説を評価するための諸原則を提示している (Principles of Testing the Translation Hypothesis in the Gospels. JBL. 53, 1934, pp. 13-30. なお J. M. Rife, The Mechanics of Translation Greek. JBL. 1933, pp. 244-52 参照)。J. de Zwaan もトーレーの Our Translated Gospels を批評しているが、大体においてトーレーの説を承認している (John Wrote in Aramaic. JBL. 57, 1938, pp. 155-71)。それに反して O. T. Allis (The Alleged Aramaic Origin of the Fourth Gospel. Princeton Theol. Review. 1928. pp. 531-572) は Burney の説を詳細に

検討してこれを斥けている。G. R. Driver (The Original Language of the Fourth Gospel. Jewish Guardian. Jan. 5, 12, 1923), W. F. Howard (in Moulton's Grammar of the N. T. Greek, ii. 1929, pp. 413-85), E. C. Colwell (The Greek of the Fourth Gospel: A Study of Its Aramaisms in the Light of Hellenistic Greek. 1931), G. A. Barton (Professor Torrey's Theory of the Aramaic Origin of the Gospels and the First Half of the Acts of the Apostles. JTS. 31, 1935, pp. 357-73) は全面的にトーレーの説を否認している。これらの意見の相違については Das Problem der Sprache Jesu. 1917; Grammatik des christlich-palästinischen Aramäisch. 1924 の著者 F. Schulthess が言っているように (Zur Sprach der Evangelien, ZNW. 21, 1922, S. 216-36, 241-58), 問題の解決のためには一層 Gräzistik と Semitistik との協力が必要とされるのである。

使徒行伝の前半の原資料がアラム語文書であったというトーレーの説は The Composition and Date of Acts. 1916 に詳述されているが (基督教研究, 第九卷三号における拙稿「使徒行伝におけるアラム語史料の問題」参照, 昭和7年4月), それによれば, 使徒行伝 1・1b—15・35まではアラム語原資料からの翻訳であるというのである。またそれによれば, ルカが紀元62年にローマに移った時, 使徒行伝の前半のアラム語文献を発見したのでこれを翻訳し, それに後半の部分 (15・36—28・31) をつけ加えて出来たものが現在の使徒行伝であって, それは64年に完成したというのである。使徒行伝の一部がアラム語の資料であったという説はそれ以前にも W. K. L. Ziegler (1801), E. Nestle (1896) A. Resch, F. Blass (Philology of the Gospels. 1898), Harnack (Lukas der Arzt. 1906), G. Milligan (1913) などによって言及されたこともあったが, 1916年のトーレーの論文はそれに一步を進めたものであって, この説については次の諸学者によって一応とりあげられている。J. M. Vosté, Revue Biblique, XIV. 1917, p. 300 ff.; Burkitt, J.T.S. XX. 1919. p. 320 ff.; J. Moffatt, Introduction. 2nd ed. 1919, p. 630 f.; A. S. Peake, Commentary on the Bible. 1920, p. 742; C. A. Scott, Expository Times. XXXI. 1920, p. 220 f.; E. F. Scott, The Literature of the N. T. 1932, p. 105 f.

トーレーの説に対する賛成者には次のような人々がある。W. C. Wilson

(Some Observations on the Aramaic Acts. HTR. Jan. 1918, pp. 74-99, The Unity of Aramaic Acts. HTR. XXIV. July, 1918), J. de Zwaan (The Use of the Greek Language in Acts, in the Beginnings of Christianity, Vol. II. 1922, pp. 30-65), H. Sahlin (see Feine-Behm-Kümmel, Einleitung in das N. T. 1964. pp. 79, 114)。これに反してその反対者は次のような新約学者であった。Foakes-Jackson (Prof. C. C. Torrey on the Acts. HTR. Oct. 1917), F. C. Burkitt (JTS. 1918-19, pp. 300-9), A. A. Vazakas (Is Acts 1-15 : 35 a literal translation from an Aramaic original? JBL. 37, 1918, pp. 105-110.—C. C. Torrey, Reply to Mr. Vazakas. JBL. 37, 1918, p. 110), B. W. Bacon (More Philological Criticism of Acts. AJT. Jan. 1918; The Chronological Scheme of Acts. HTR. 1921, pp. 137-166, Some “Western” Variants in the Text of Acts. HTR. April, 1928), K. Lake (Landmarks in the History of Early Christianity, 1920, p. 64, The Internal Evidence of Acts, in The Beginnings of Christianity. Vol. II. 1922), E. J. Goodspeed (The Origin of Acts, JBL. 39, 1920, pp. 83-111; New Solutions of N. T. Problems, 1927, pp. 65 ff.), A. H. McNeile (Introduction, 1927, pp. 84, 85), D. W. Riddle (The Logic of the Theory of Translation Greek. JBL. 51, 1932, pp. 13-31), W. L. Knox (The Acts of the Apostles, 1948), H. F. D. Sparks (The Semitisms of Acts. JTR. N.S. 1, 1950, pp. 18-28), F. F. Bruce (The Acts of the Apostles, 1951). M. Wilcox (The Semitisms of Acts, 1965), J. Jeremias (Abba, 1966, p. 247)。

その中 Bacon の反対論に対してはトーレーは次の論文で答えている。Fact and Fancy in Theories concerning Acts. A.J.T. Jan., 1919, pp. 61-86, April, 1919, pp. 189-212。さらに H. J. Cadbury (Luke-Translator or Author? A.J.T. July, 1920, pp. 436-455, The Making of Luke-Acts, 1927. p. 70 ff.) は中立の立場をとっている。A. H. McNeile (An Introduction to the Study of the N. T. Revised ed. 1953, p. 102) は、使徒行伝の前半のアラム語文書は単一の文書ではなかろうと、次のように述べて一種中立の立場をとっている。Torrey has at any rate made clear the strong Aramaic colouring of the narratives. It is quite possible that they rest on Aramaic documents, but what he has not satisfactorily

proved is that they rest on a single document. (この点においては前記の Vazakas の所説も同様)。R. A. Martin は *Some Syntactical Criteria of Translation Greek*. (*Vetus Testamentum*, X. 1960, pp. 295-310) の論文を書いているが、*Syntactical Evidence of Aramaic Sources in Acts I-XV* (*N. T. Studies*, Vol. 11. No. 1 Oct. 1961, pp. 38-59) において、使徒行伝の前半のアラム語資料の問題を *καί* 及び *δέ* の使用度及び *ἐν* 等の前置詞の使用名詞と冠詞とを離して用いる用法等について統計的に論じ、その結論として、H. Haenchen (*Die Apostelgeschichte*. KEK. 1961), H. Conzelmann (*Die Apostelgeschichte*. HNT. 1963) 等の70人訳よりの影響説に反対して、ルカ 1, 2 章の背後にはヘブル語の資料、使徒行伝の前半の背後にはアラム語の資料が存在していたことを認めている。しかしその資料は文書体のものであったかどうかは確定できないという慎重な態度をとっているが、何故かこの論文には一言もトーレーの著作に言及していない。

なお使徒行伝 5・13の「ほかの者」の真意については諸説があって、これは新約の謎の1つであるが、トーレーは 'The Rest' in Acts V. 13 (*Ex. Times*, Vol. xlvi. 1934-5, p. 253-4) の小論において、この *λοιπῶν* は *ὁ λαός* (the common people) と対比すべきものであるとし、このアラム語原語は *saabaiā'* (*πρεσβύτεροι* the elders) で、*sh'ārā'* (the rest) と読み誤ったという推論をしている。以前の *Composition and Date of Acts*, pp. 31 f. においては、この節の意味上の困難を避けるため、動詞の「交わりに入る」(*join himself to*) は「論争する」(*contend with*) が原意であるとしている。また Hilgenfeld が「ほかの者」は「レビ人」(*Λευιτῶν*) のことであろうと解したことに言及されている。

去る6月22日に同志社で講演された M. Black 博士の著 *An Aramaic Approach to the Gospels and Acts*. 2nd ed. 1954 は福音書および使徒行伝の背後にあるアラム語問題を詳細に取り扱った書物であるが、トーレーが通俗的な著作でその見解を示したことは不満足であると述べ、トーレー、バーネー等の「誤訳」の例には納得できないものがあることを指摘し、「誤訳」については断片的に論ずることは誤りで、全体の章句の背景において取り扱われるべきであるという S. R. Driver (*Expositor*, ser. IV. viii. p. 430 f.) の説に賛意を表してい

る。またトーレー、バーナーは Westcott-Hort または Tischendorf のギリシヤ語本文によって立論しているが、Wellhausen (Einleitung. p. 15) や A. J. Wensinck (The Semitisms of Codex Bezae and their Relation to the non-Western Text of the Gospel of Saint Luke, in the Bulletin of the Bezan Club, xii. Leiden, 1937) のように、Codex Bezae (Codex D or Cantabrigiensis) を重視する翻訳説にも考慮を払う必要があると述べている (op. cit. p. 5, 212)。この点については J. H. Moulton もその Grammar (Vol. I. 2nd ed. 1906, p. 242) において次のように言っている (M. Black, op. cit. p. 242)。He (Wellhausen) shows that D in a large number of places stands distinctly nearer the Aramaic which underlies the Synoptic records. If this is proved, we have manifestly taken a large step towards the solution of our great textual question. また単にアラム語と言ってもそれには種々の方言があり、イエスの用いられたアラム語の性格についてもっとよく検討する必要があると述べている。M. Black (The Aramaic spoken by Christ and LK 14 : 5. JTS. new series, Vol. I. p. 60) は J. Jeremias の説 (Die aramäische Vorgeschichte unser Evangelien. Theol. Literaturzeitung, 1949, Nr. 9. p. 528) を紹介しているが、それによれば、パレスチナのタルグムのアラム語の部分がイエスの話されたアラム語の方言に近いというのである (なお G. Dalman, Worte Jesu. 2te Aufl. 1930, p. 371 参照)。

以上福音書および使徒行伝の翻訳説についてのトーレーの見解およびそれに対する評論を少しく詳細に述べたが、トーレーの本領は新約ではなく旧約の諸方面に見出さるべきであって、その研究歴の初期においては、特に「歴代志史家」(Chronicler) の歴史観、その史料編集についての実績を詳細に研究されたようである。Chronicler は言わば Deuteronomist (申命記史家) に対比すべき史家で、この 2 人は近代的な意味での歴史家ではなく、それぞれの立場 (祭司的と預言者的) で旧約の救済史を編集した宗教家である。その目的のためには、前者は後者よりも歴史的事実を無視して執筆していることが多く、彼は Historiker ではなく Midraschist と言わるべき者で、その中でも最も注目すべきことは、バビロン捕囚記、特にその帰還の物語り (エズラ、ネヘミヤ両書における) であって、旧約史家の間では「捕囚期後の時代」(post-exilic period)

という表現がよく用いられているが、大多数の者が捕囚としてバビロンに移されたとか、またバビロンから大がかりの帰還をしたいというような話はすべて歴代志史家の創作であって、ユダヤ人の大部分は元のようにエルサレムを中心とする生活を続けていたというのである。同様の説は Kloster (Die Wiederherstellung Israels in der persischen Periode. German tr. by Basedow, 1895) によっても発表されていた。エゼキエルが捕囚の人々に預言するためにバビロンに行ったということも史実ではなく、エズラも史的人物ではなかったというのである。このエズラについては1889年に M. Vernes (Precis d'Histoire juive; pp. 579 ff.) によってすでに伝説的人物とされており、トーレーの後には H. P. Smith, C. F. Kent, G. Hölscher, R. Fruin (1929), A. Loisy (1933), E. Kautzsch, S. Mowinckel, M. Haller, E. S. Cobb, R. H. Pfeiffer 等がトーレーに同調している (なお H. H. Rowley, Nehemiah's Mission and Its Background. Bulletin of the John Ryland Library. Vol. 37, No. 2, March 1955. pp. 528-561 参照)。

エズラについてのトーレーの説は Ezra Studies (Chicago, 1910) に詳説されているが、その他にも The Composition and historical Value of Ezra-Nehemiah (Giessen, 1896); The Apparatus of the Textual Criticism of Chronicles-Ezra-Nehemiah (Studies in honor of W. R. Harper, II, 1908, p. 55-111); The Chronicler's History of the Return under Cyrus (A. J. S. L. 37, 1920-21, p. 81-100); Sanballat "the Horonite" (J.B.L. 47, 1928, p. 380-389); A Revised View of First Esdras, in Ginzberg Jubilee Vol., 1945 等はこれらの問題に関する論文の重なるものである。Sanballat "the Horonite" (ホロニびとサンバラテ) の論文に対しては、H. H. Rowley がトーレーの説を紹介して一層詳細にこれを論じている (Sanballat and the Samaritan Temple. Bulletin of the John Ryland Library. Vol. 38, No. 1, Sept. 1955. pp. 166-198)。トーレーによればネヘミヤの反対者であったサマリヤのサンバラテと名のる人は2人あって、後のサンバラテがネヘミヤと同時代の人でアレクサンダー大王の時まで生きていたというのである。また「ホロニびと」というのはエルサレムに近いベテ・ホロンに関係のある名で、軽蔑の意味が含まれていると見ている。晩年に出された The Chronicler's History of Israel. 1954. は歴代志史家の著作活動についての総合的研究

とも言うべきもので、この書において著者はエズラ・ネヘミヤ物語りの背後にある歴代志史家の記録(歴代志, エズラ, ネヘミヤ)を、2000年の間そのままに放置されていた状態から元の形の正しい順序にもどして、ヘブル語原文およびその英訳を示したもので、その順序は、歴代志上下からエズラ1章, 第1エズラ書4・47—5・6, エズラ2—8章, ネヘミヤ7・70—8・18(元はエズラ記の一部であったもの), エズラ9・10章, ネヘミヤ9, 10章, 1・1—7・69, 11—13章の順になっている。このイスラエル史の後半のエズラ, ネヘミヤ両書においては、その元の順序が非常に乱れているというのである。歴代志, エズラ, ネヘミヤの三書が1人の著者の手によるものであることは、Arvid S. Kapelrud, *The Question of Authorship in the Ezra-Narrative* (Oslo, 1944)によっても確認されたと言われている。トーレーは初め「ネヘミヤの回顧録」はネヘミヤ自身の作と考えていたが、1954年には、これも皆歴代志史家の筆によって書き直されていると考えを変えている。また第2マッカビー書2・13の説明によって、この歴代志史家はネヘミヤ自身であったというのが古い伝承であったということを指摘している。そしてこの史家の編集は紀元前250年ごろに行われたものであろうと言っている。トーレーによれば、今日の形のネヘミヤ記にはエズラに関する記事が2つあり(ネヘ7・70—8・18——エズラの律法朗読, ネヘ9・1—10・40——エズラの祈りと契約の押印者等), これらはもとエズラ記にあったものが、写字生の誤りのため今日のような形になったもので、前記の順序が元の正しい順序であると言うのである。このトーレーの新説はG. F. Mooreによって承認されたが、多くの旧約学者の反対を受け(H. G. Michel, *The Wall of Jerusalem acc. to the Book of Nehemiah*. JBL. 1903, pp. 92 ff. その他), KlostermannはHauckの*Realencyclopädie*において、この説は*überberatene Phantasie*と評したとのことである、今日ではW. Rudolph (*Esra und Nehemia*. 1949)も大体においてトーレーの示した順序に賛意を表している。なおトーレーによれば、いわゆる「祭司典」(P資料)なるものは、独立の資料としては存在しなかったと見ているのである(*Ezra Studies*. pp. 196 ff.)。

次に注意すべき著作は*The Second Isaiah*. 1928であって、この大著においては第3イザヤ書説を否定して、第2イザヤ書(34—66章, ただし36—39章の

部分を除く)の統一性を強調し、それは紀元前400年ごろに書かれたもので、その中でペルシャのクロス王をメシヤとする有名な一連の預言は、その前後関係の意味とヘブル詩の韻律を乱すという理由で、クロスの名は後の編者の挿入であるとしてこれを除去し(この点についてはトーレーの次の論文参照。Isaiah 41, HTR. 44, 1951, pp. 121-136. 同様の説は A. Kaminka, *Le Prophétie Isaie*. Paris, 1925 も提唱している), またバビロン, カルデアの地名も, バビロン捕囚とその帰還のことを強調する編者の意図的な挿入であるとして, この2つの地名が続いて用いられている3節からこの地名を除いた原文を考えたのである(43・14, 48・14, 20)。トーレーによれば, 第2イザヤ書は40章から始まるのではなく, 34, 35の両章が第2イザヤ書の最初に置かれていたと言うので(*Some Important Editorial Operations in the Book of Isaiah*. JBL. 1929, pp. 109-129), それ以前にも, イザヤ書35章が第2イザヤの預言に属するものであるという説は R. B. Y. Scott, A. T. Olmstead によって提唱されていたと述べている。また第2イザヤ書に示されているメシヤ観は旧約の最高また独特のもので, そのメシヤ観はその後も一般に認められ, 福音書記者にも深い影響を及ぼしたというのである。この「義人」(イザヤ53・11), 「世界の救主」(49・6), 「神の選んだ者」(24・1, ルカ9・35)としての「神的(通常の間人ではなく)メシヤ」(9・6その他)のことは *The Influence of Second Isaiah in the Gospels and Acts*. JBL. 48, 1929, pp. 24-39 にも詳説されている。

第2イザヤ書の研究に続いて発表された *Pseudo-Ezekiel and the Original Prophecy* 1930. の力作においては, エゼキエルの偽名説を強調し, Gray や Driver 以降のエゼキエル書の Unity の説に対して強く反対し, エゼキエル書が紀元前5世紀の編集者による文書であるという G. Hölscher (*Hesekiel, der Dichter und das Buch*. 1924) の説を一步進めて, それは紀元前230年ごろ書かれたもので, その作者はマナセ王(前696—641年)の時代に預言したエゼキエルという預言者の著作のように見せかけたものであるとしている。すなわちエゼキエル書は偽名の書であって, 作者は歴代志史家の影響を受けて, バビロン捕囚の事実を誇張して書いたものであると言うのである。この見解はそれより以前すでに *Notes on the Aramaic Part of Daniel* (*Transactions of the Connecticut*

Academy of Arts and Science XV. 1909) の序文に言及されており、さらに Ezra Studies (1919. p. 288. n.) にも一言し、マルチ記念論文集 (Marti-Festschrift. 1925) 中の Alexander the Great in the O. T. Prophecies (p. 248. n.) においてもこの考えを述べている。G. A. Cooke (Ezekiel, I.C.C.) はこの説を大胆な「力技」(tour de force) と評しているが、エゼキエル書に後世の年代を与えることは L. Zunz (Die gottesdienstlichen Vorträge der Juden. 1832; ZDMG. 27, 1873, pp. 676 ff.), L. Seinecke (1884), A Geiger (Urschrift und Übersetzungen der Bibel. 1859), Verme, Havet 等にも見られることであって、必ずしもトーラーだけの「力技」ではない。Albright (op. cit. p. 322-23) は、エルサレムの荒廃およびバビロン捕囚についてのトーラーの説は考古学的見地より見て誤りであることが立証されていると述べている (Cf. W. F. Albright, The Chaldean Conquest of Judah. A Rejoinder. JBL. 51, 1932, pp. 281-282)。なおこの問題についてはトーラーの次の三論文に説明が行われている。Ezekiel and the Exile (JBL. 51, 1932, pp. 179-182); Certainly Pseudo-Ezekiel (JBL. 53, 1934, pp. 291-320); Notes on Ezekiel (JBL, 58, 1939, pp. 69-86)。第1の論文は Albright (The Seal of Eliakim and the latest pre-exilic history of Judah, with some observations on Ezekiel. JBL, 51, 1932, pp. 77-106) の論文に対する返答で、第2の論文は Shalom Spiegel の反論 (Ezekiel or Pseudo-Ezekiel? HTR. 24, 1931, pp. 245-321。その後また次の反論が出た。Toward Certainty in Ezekiel. JBL. 1935, pp. 144 ff.) に対する返答であって、エゼキエル偽名説について、さらに論考を推し進めたものである。エゼキエル書の(編集の)年代をこのように後世に移すことについては次の人々が賛意を表している。M. Burrows (The Literary Relation of Ezekiel. 1925), J. Smith (The Book of the Prophet Ezekiel. 1931), G. K. Berry (Was Ezekiel in the Exile? JBL. 58, 1930, pp. 83-93), C. Kuhl (Theol. Literaturzeitung, 16, Jan. 1932), G. Dahl (Crisis in Ezekiel Research, in Quantulacumque, Studies presented to K. Lake. 1937), Nils Messel (Ezechielfragen. 1945), L. E. Browne (Ezekiel and Alexander. 1952)。Browne によれば、エゼキエルはアレクサンダー大王時代の人で、前344—343年にエルサレムからヒルカニヤに移された捕囚の1人と見ている。またエゼキエルがバビ

ロンではなくパレスチナ(エルサレム)において預言したという説は次の人々によって主張されている。V. Hentrich (*Ezechielprobleme*. 1932), W. A. Irwin (*The Problem of Ezekiel*. 1943), W. H. Brownlee (*Exorcising the Souls from Ezekiel 13 : 17-27*. JBL. 1950. pp. 367 ff., *The Book of Ezekiel—The Original Prophet and the Editors*. Unpublished dissertation. 1947)。Brownleeによればエゼキエルはエルサレムの陥落前後の時代にエルサレムで預言した人で、後3世紀の中頃の編者の手によって、反サマリヤの宣伝文書として現在のエゼキエル書が書かれたものとしている。これに対してトーレーの説に批判を加えているのは次のような人々である。K. Budde (*Zum Eingang des Buches Ezechiel*. JBL. 1931. pp. 20 ff.), C. Kuhl (*Th. L. Z. Bd. lvii*. 1932. Cols. 27 ff.), W. E. Barnes (*The Scene of Ezekiel's Ministry and His Audience*. JTS. Vol. 35, 1934, pp. 163 ff.), J. Battersby Harford (*Is the Book of Ezekiel Pseudo-Epigraphic?* E. T. Vol. 43, 1931-2, pp. 20 f; *Studies in the Book of Ezekiel*. 1935. pp. 38 ff.), G. A. Barton (*Harvard Symposium on Archaeology and the Bible*. 1938, p. 63), L. Dennefeld (*Introduction à l'Ancien Testament*. 1935, p. 172)。

H. H. Rowley は1953年に最近のエゼキエル書研究史のことを述べているが(*The Book of Ezekiel in Modern Study*. *Bulletin of the John Ryland Library*, Vol. 36, No. 1, Sept. 1953, pp. 146-190), 彼自身はトーレーの説に反対して、従来の考え方をとり、エゼキエルはエルサレム滅亡の前後にバビロンだけで活動した預言者であるとしている。

前述の Ezra Studies (1910) および Notes on the Aramaic Part of Daniel (1909) さらに Stray Notes on the Aramaic of Daniel (JAOS. 43, 1923, pp. 229-238)においては、マソラの学者たちがヘブル語またはアラム語の本文を決定する時、二者択一すべき語句の綴字や母音を(不手際に両者を)結合して残した痕跡があるという興味ある説を提唱して、その実例とおぼしいものを列挙している。また“Yāwān” and “Hellas” as designations of the Seleucid Empire. JAOS. Vol. 25, 1904. において、ヤワンすなわちギリシヤはシリヤ国のことであると解し、ダニエル11・2には sar (君または主)というヘブル語が脱落したと解して、2節の後半を次のように訳するのである。「……その富によって強くなっ

た時、すべてのものの主 (the Lord of All) は〔ペルシャの国の代りに〕ヤワンの国を起すでしょう」(Cf. Stray Notes, JAOS, 1923, p. 234)。この場合第四の王はダリヨス3世 (Codmannus, B.C. 338-331) と見るのである。このトローラーの説は J. A. Montgomery のダニエル書注解にも可能性の多い説として採用されている。なお The Foundry of Jerusalem (JBL. 55, 1936, pp. 247-260) の論文において、マタイ27・9, 10に引用されているゼカリヤ11・13の句(マタイ福音書にはエレミヤ32・8と結合されて、エレミヤの預言として引用されている)「彼らによって、わたしが値積られたその尊い価を、宮のさいせん箱に投げ入れよ」の「さいせん箱」はマソラ本文の元の語義ではなく、それは70人訳の如く、宮の「鋳物場」(*Χωρευτήριον*, foundry) の意であると説くのである。この元の単語は古い英訳には (to the) potter と直訳され、文語の邦訳にも「陶人」となっているが、ここからマタイ27・7, 10(口語訳)の「陶器師の畑」に発展したのである(最近の英独訳には treasury, Tempelschatz, すなわち、「さいせん箱」となっている)。紀元前300年より以前の時代においては、エルサレムの神殿に奉獻される金銀の類は単に通貨だけではなく金銀の器具やかたまりの如きものもあって、それは鋳物場に入れられて種々の形のものに鋳なおされたのである。出エジプト記32・4の「工具で型を造り」も「型に注ぎ入れる」ことであって「工具」とは関係がないというのである。またマタイ27・7, 10の「陶器師」も「銀細工人」または「細工人」(*Χωρευτής*, craftsman of the temple foundry, 土師17・4, イザ40・19, 41・7)の意であると論じている。

さらに The Beginning of the Dura Synagogue Inscription (Jewish Quarterly Review. Vol. 28, 1937-38, pp. 294-299) においては前245年 (556 Seleucid Era) に建てられた Dura-Europos におけるアラム語の碑文を再現し、これを翻訳している。その推定による英訳は次のとおりである。This house was built in the year 556, this corresponding to the second year of Philip Julius Caesar; in the eldership of the priest Samuel, son of Yeda'ya, the just. Now those who stood in charge of these labors were (the following): Abram the Treasurer, and Samuel, son of Saphara, (and) ... the proselyte ...

エレミヤ書についての研究は単行本ではなく The Background of Jeremiah

1-10 (JBL. 56, 1937, pp. 193-216) において不完全な形において行われているが、もっと詳細な研究を残さなかったことが惜しまれる。この論文は Albert Condamin の著 *Le Livre Jérémie* (3 ed. 1936) の書評の形式であるが、トーレー自身の説の一斑をここに発表している。それによればエレミヤ書もエゼキエル書と同様に通常認められている時代よりはもっと後世に書かれたもので、その預言は多く「事後預言」(vaticinium post eventum) に属し、大体紀元前3世紀ごろの作であるとしている。ここにもトーレーの創見が窺われるが、まずエレミヤ書の初めの1—10章の部分はエレミヤの預言の代表的な部分であると見なし、このヨシア王の13年に臨んだと言われる(1・2)主の言葉はエレミヤ書のどれだけの範囲を指すのかが問題であるとしている。7, 8章においては当時の「背信」(3・20), 「驚くべきこと, 恐るべきこと」(5・30)が多く行われていたのであるが、その最たるものは、エルサレムの神殿における異教的な儀式とヒンノムの谷のトペテにおける偶像礼拝であった。7章に書かれている預言は26・1—7とよく似ているが、それはエホヤキム王の元年の時の預言ではないと言うのである。1章より10章までは後世に書かれた痕跡が多く見えており、そこには列王紀の影響も見え(下23・27=7・14, 15), ハバクク書の影響もあり(ハバ1・8, 9=4・13, 5・6, 6・22—25), 特に第2イザヤ書よりの影響が顕著である(イザ44・9—11=10・3—5, イザ49・1, 5, 8=11・5, イザ50・1=3・8, イザ66・3, 43・24=6・20等)。有名なエレミヤ10・11のアラム語の1節は、通常説かれているように、欄外の句が本文に入ったものではなく、元から本文にあったものと解している。さらに「北方からの敵」(4・6, 6・22, 10・22, 50・9, 41, 51・48)はスクテヤ人またはカルデヤ人のことではなく、また終末時の敵というような想像的のものでもなく、エゼキエル書の「ゴグの軍」と同様にアレクサンダー大王の遠征軍のことを指したものであると解している(Cf. *Alexander the Great in the O. T. Prophecies*. BZAW. 41, 1925; *Pseudo-Ezekiel*, 1930; *The Prophecy of Habakkuk*, in *Jewish Studies in Memory of G.A. Kohut*. 1935, p. 565-582 参照)。その他1—10章以外の部分には詩篇よりの影響も見られ(詩31・13=20・10, 詩35・6=23・12, 詩35・12=18・20, 詩107・1, 22=33・11, 詩14=20・7—18), 第一人称で述べられている、いわゆる Ich-Form

のエレミヤの預言も (Er-Form のバルクによる預言に対して) 必ずしもエレミヤ自身のものではないと言うのである。一般的に言えば、1—10章の部分はヨシヤ王の改革以前の時期におけるエレミヤの預言を示すために書かれたもので、1章から18章までは1の文学的単位を構成しており、エレミヤ書の70人訳はエレミヤ書の初期の形を示しておると言うのである。これらの説は一の私見として示され、十分な論証が行われていないが、エレミヤ書の編集の時期を後世に持って行くことはトーラーの私見ではなく、それまでにすでに Cornill, Cheyne, Schmidt, Duhm, Volz, Welch 等によって大なり小なり唱導されていたことであつた。その他これに類似の説は Mowinckel, Hölscher, Horst, Rudolph 等によって唱導されている。Proverbs Chapter 30 (JBL. 73, 1954, pp. 93-96) の論文においては、箴言30章をその70人訳と比較して、その原形と見られる本文を推論している。その他 The Messiah Son of Ephraim (JBL. 66, 1947, pp. 263-277) 等がある。

次に紹介すべき著作は外典の諸書を取り扱った The Apocryphal Literature. 1945 で、これは外典および偽典の簡単な概説書であるが、その中には従来 Kautzsch や Charles の編書にはなかつた「預言者の伝」(The Lives of the Prophets. 1946)、「ヨブの遺言」(The Testament of Job) などの解説も取り入れられている。外典や偽典の諸書においても、トーラーは多くヘブル語またはアラム語の原本説を主張し、その誤訳の存在などを指摘している(トービット書 14・10の「マナセ」は「彼の恩人」と訳すべきもの等。R. S. V. では、このマナセをアヒカーに代えている)。トーラーによれば、外典諸書の中、初めからギリシャ語で書かれているものは、第2(2・19以下)、第3、第4マッカビー書、シビルの神託、ソロモンの知恵の一部、エステル書の追加の二勅書の部分などである。ヘブル語またはアラム語で書かれたと見られる諸書は左のとおりである。

原語がヘブル語

バルク書、ベン・シラの知恵、第1マッカビー書、ユデテ書、12族長の遺言、ソロモンの詩篇、ソロモンの知恵(一部)、預言者の伝。

原語がアラム語

第2 マッカビー書の初めの二通の手紙, 第1 エスドラ書の3人の近侍の話, トービット書, エステル書の追加, エレミヤの手紙, エノク書, ヨベルの書, 第2 エスドラ書, バルクの黙示録, モーセの昇天, ヨブの遺言, モーセの黙示録。

また J. A. Fabricius の著(1694—1722)以来一般に用いられている「外典」(Apocrypha)および「偽典」(Pseudepigrapha)の名称は誤解を与え易いものであるとして、これらを一括して「外典的文書」(Apocryphal Literature)という名を与えて、その著書の表題としている。トーレーによれば、「離散」(ディアスポラ)のユダヤ人と言われる人々がすべてギリシヤ語だけをを用いていたのではなく、その日用語は大体アラム語であったと考えており (The Bilingual Inscription from Sardis. AJSL. 34, No. 3, 1918), 旧約の70人訳もそれはヘブル語を忘れたユダヤ人自身のために造られただけのものではなく、異邦人に対する宣教用のものであったと解している。外典に関するトーレーの論文としては次のようなものがある。

“Apocalypse” in Jewish Encyclopaedia. Vol. I. 1907, pp. 669—675; The Site of Bethulia (JAOS, 20, 1899, pp. 160—72), The Surroundings of “Bethulia” (Florilegium Melchior de Vogüé, 1909, pp. 599—605) において、ベツリヤの原意は House of ascent, Lofty abode の書で、シケムのことであると説明し、The Nature and Origins of “First Esdras” (AJSL. 1907), Story of the Three Youths (AJSL. 23, 1906, pp. 177—201), The Apparatus for the Textual Criticism of Chronicle-Ezra-Nehemiah, in O. T. and Semitic Studies in Memory of W. R. Harper, 1908, pp. 55—111), A Revised View of I Esdras in Ginzberg Jubilee Vol., 1945) 等において、特にその第三の論文において、歴代志史家による歴代志, エズラ, ネヘミヤを包含するイスラエル民族の歴史の成立の経過を述べている。すなわち第1 エスドラ書は1の独立した文書ではなく、それは歴代志史家の筆による歴史書の最も古いギリシヤ語訳の一部をなすものであって、オリゲネスの Hexapla の70人訳の欄にも取り入れられており、このギリシヤ語訳は歴代志・エズラ・ネヘミヤより成る1の連続した歴史書の真正な「70人訳」であったというのである。第1 エスドラ 3・1—5・6 の部分が後の加筆として

ヘブル語の原本から削除され(紀元前2世紀の初期, 同時に第1エズドラ4・47—56, 4・62—5・6の18節も必要上除かれた), エズラ4・6—24の部分も誤って現在の位置に置かれ, その形のままのヘブル語の文書が後にテオドチオンによってギリシャ語に訳され, 彼の訳が長く「70人訳」として通用して来たというのである。“Nineveh” in the Book of Tobit (JBL. 41, 1922, pp. 237–245) においては, トービット書のニネベはバグダードの近くのセルキア (Seleucia) のことであるとの説を立て, The Older Book of Esther (HTR. 37, 1944, pp. 1–40) においては, エステル書の6つの追加(A–F)は追加と言うべきものではなく, これはアラム語の元のエステル記に含まれていたもので, それは紀元前114年にエルサレムでエジプトの人によってギリシャ語に訳されたものとしている。ただしB,Eの部分はこの訳者がギリシャ語で書いてつけ加えたものと見ている。エステル9・29の「このプリムの第2の書」というのは現在の正典のエステル記を指し, それは元のエステル記の省略であることを示したものと解している(Patonの注解では, これを the following second message と訳して, その次の話のことを指すものとしている)。I–IV Maccabees (Ency. Biblica, 1903) はマッカビーと名付けられている諸書についての詳細な解説であり, Schweizer’s “Remains of a Hebrew Text of I Maccabees”, (JBL. Vol. 1903, pp. 51–59) においては, Abraham Schweizer の Untersuchungen über die Reste eines hebräischen Textes vom ersten Makkabäerbuch (Berlin, 1901) を批判して, ヘブル語の第1マッカビー書の短縮されたこの写本は元の本文ではなく, ギリシャ語の本文から訳されたものと断定している (Cf. Bousset, Judentum, 1903, pp. 17, n.). Three Troublesome Proper Names in I Maccabees (JBL. 52, 1934, pp. 31–32) においては, 9・15の「アゾト山」はアシドドの誤りであること, 12・37の「カペナサ」(Chaphenatha)は「泉の曲り」(Bend of the fountains)の意で, これは処女の泉からシロアムの池に至る中間の曲った場所であり, 14・28の「アサラメル」(Asaramel)は「アサラMEM」すなわち「水の門」(ネヘミヤ8・1, 3)のことであると説明する。Die Briefe 2 Makk. 1:1–2:18 (ZAW. 29, 1900, pp. 205 ff.), The Letters prefixed to II Maccabees (JAOS. 160, 1940, pp. 119–150) において, 第2マッカビー書の冒頭の2つの手紙(1・1—9, 1・10—

2・18)はエルサレムからエジプトのユダヤ人に送られた形式のものであるが、これは第2マッカビー書の著者によって書かれたものではなく、アラム語の原本を著者が訳したものとし、その原文と見られるものを提示している。“Taxo” in the Assumption of Moses (JBL. 62, 1943, pp. 1-17), “Taxo” once more (JBL. 64, 1945, pp. 395-397) の二論文において、「モーセの昇天」(9・1)の中に出る「タコ」(Taxo) という人名はマッカビーの乱を起したマタチアス (Mattathias) を指す隠語(アラム語によるゲマトリア法によれば、ハスモン人となる)と見ている。ただし F. C. Burkitt によれば、「タコ」は「タコス」の誤りで、それはゲマトリアの方法によって「エレアザル」(第4マッカビー書 1・8) のことであると言い、さらに S. Zeitlin によれば (JQR. 38, 1946), これはハドリアヌス帝(紀元132—135年)に反対して立ったユダヤ人をなだめたラビ・ヨシュアのことであると解している。The Hebrew of the Geniza Sirach (Alex Marx Jub. Vol. 1950, pp. 585-601), A Hebrew Fragment of Jubilees (JBL. 71, 1952, pp. 39-41) においては、1950年に E. L. Sukenik が発表した27・19—21のヤコブの夢に関する物語りの1節はアラム語からヘブル語に訳されたものであるという E. Littmann の説に同意を表して、この時代にはアラム語からヘブル語へまたヘブル語からアラム語へ訳されることは我々の想像以上に多く行われたということを指摘している。Notes on the Greek Text of Enoch (JAOS. 62, 1942, pp. 52-66); Alexander Jannaeus and the Archangel Michael (V.T. 4, 1954, pp. 208-211) の二論文はエノク書を取扱ったものであるが、後の論文においては、エノク書著作の年代は紀元前96年の直後のことで、その時代はハスモン王家と人民との間の対立が激化し、90・13—16はその時代のことを暗示したもので、90・13の「雄羊」は Alexander Jannaeus のことで、天使ミカエルによる救いのことが暗示されているというのである。その他の小論文としては、1929年に出版された Encyclopaedia Britannica の14版に、Ahasueros, Daniel, Esther, Ezra, IV Ezra, Books of Ezra and Nehemiah, Nethinim (ネテニ人)についての寄稿があり、また The Magic of “Lotapes” (JBL. 68, 1949, pp. 325-27) の小論文があるが、その論文においてはプリニウス (Pliny) の「自然誌」(Naturalis Historia) の Lotapes の魔術というのは Iotape の魔術の意で、Iotape はヤハウエ

のことであるとしている。ダニエル 9・2 の70人訳には ἐγένετο πρόσταγμα τῆ
 ῥῆ ἐπὶ Ἱερεμίαν とあるが、この τῆ ῥῆ もヤハウエを指すことは J. A. Montgo-
 mery の注解 (I.C.C. p. 311) にもそのことに言及している。新約に関する小論
 文としては、Strain out a Gnat and adorn a Camel (HTR. 14, 1921, pp. 195-196)
 があり、それによれば Ciasca によるアラビア語訳福音書のラテン語重訳にお
 いて、マタイ 23・24 の camelum ornantes は vorantes (swallowing) の誤訳で
 であろうと指摘している。また The Name Iscariot (HTR. 36, 1943, pp. 53-62)
 においては、イスカリオテのユダの「イスカリオテ」は、ユダの反逆の後につ
 けられた名で、そのアラム語の意味は Judas the False One の意である、とい
 う説を立てている。その他 James the Just and his name Oblias (JBL. 1947,
 p. 93 ff.), In the Fourth Gospel the Last Supper was the Pascal Meal (JQR.
 42, 1951-2) の論文があるが、後者においては、その表題のように、ヨハネ福音
 書の最後の晩餐は過越の祭の食事として守られたことを強調している。

トローレーはその晩年の書 Documents of the Primitive Church. 1941 におい
 て原始キリスト教におけるアラム語の諸文書の存在またそれが多く消滅した理
 由などを述べ、さらに The Aramaic Period of the Nascent Christian Church,
 (Z.A.W. 1952-3, pp. 205-223) の論文において、紀元30年から80年までの50年
 間は原始キリスト教会の「アラム語時代」と言うべき時代で、その時期におい
 ては、キリスト教はまだユダヤ教とは完全に分離せず、またその時期にはアラ
 ム語およびヘブル語の文書は言わばキリスト教の公認の文書であって、ギリシ
 ヤ語を日常語とする異邦人の教会においても、ある程度までアラム語の文書が
 用いられていたと説いた。この期間に福音書、使徒行伝の前半、黙示録などが
 アラム語で書かれたので、マルコ伝の初期のアラム語の形のものは紀元40年ご
 ろに書かれたものであり、黙示録もドミチアヌス帝の治世中(81—96年)に書か
 れたものではなく、紀元68年に書かれたと考えるのである。なお新約全体に散
 見すると見られるアラム語の重要語を選択してこれに略注を加えたものは次の
 論文である。Studies in the Aramaic of the First Century, A.D. ZAW. 65, 1953,
 pp. 228-47. なお紀元第1世紀の後半に流布していたと思われる旧約正典の諸
 書のギリシヤ語音訳のアラム語の表の写本については次の論文がある。Ein

griechisch transkribiertes and interpretiertes hebräisch-aramäisches Verzeichnis der Bücher des AT aus dem I Jh. n. Chr. (Th. Lz. 77, 1952).

トーレーは1956年11月12日に死去したが、その2年後、1958年に *The Apocalypse of John* が遺著として刊行された。この著にも黙示録がドミチアヌス帝の治世ではなくネロ帝(黙示録には666の数字をもって暗示され、復活してまた帝位に登るとのうわさが立てられた)の死後、7か月弱の期間帝位についていたガルバ帝の治世中に(68年)書かれたと見て、その理由を詳細に述べている。ここにはそれを詳述することはできないが、黙示録17・10の「そのうちの5人はすでに倒れ、ひとは今おり、もうひとは、まだきていない」の「ひとは今おり」は5人目のネロ帝に続くガルバ帝のことであるとして、黙示録の著者は当時の不安な政情を察して、ガルバ帝も次の皇帝も短期間で退位し、ネロが第8代目の皇帝として近い将来は再びバルチャから帰ってきて、以前のように皇帝礼拝を強要するというような当時流行の思想を前提としていたというのである(この「再生のネロ」*Nero redivivus* が滅ぼされると新天地が到来するのである)。このようなことはダニエル書においてアンチオカス4世の最後やそれ以後の情勢についての不完全な予想をした前例に徴しても理解できることであると説明している。黙示録のセム語の背景については R. H. Charles (ICC. 1920), B. Y. Scott (*The Original Language of the Apocalypse*, 1928) 等がそのことを指摘しているが、Albright はその著 *From the Stone Age to Christianity*. 1957, p. 22 において、次のようにトーレーの説に賛意を表している。C. C. Torrey is probably right in dating it (the Apocalypse) about 68 A.D., shortly before the fall of the Second Temple. なお黙示録16・16の「ハルマゲドン」の真意について1938年に1の論文を発表しているが(*Armageddon*, HTR. July, 1938), それによれば、ハルマゲドンはイザヤ14・13の「北の果なる集会の山」のことであるとし、詩篇48・2の「シオンの山は北の端が高く、うるわしく」は「北の端にあるシオンは高く、うるわしく」の意で、「北の端のシオン」は南の端のシナイ山に対するものと解している。すなわちハルマゲドンはシオンの山を指すという説である。

以上はトーレー博士の90年の全生涯にわたる業績を略述したものであるが、

それは主として(1)福音書、使徒行伝、黙示録についてのアラム語原本からの翻訳説、(2)歴代志史家についての研究(エズラ、ネヘミヤ両書における元の順序の回復)、(3)第2イザヤ書の研究、(4)エゼキエル書の著者およびその年代についての研究、(5)外典諸文書の研究、(6)その他旧約の諸書についての研究に分類することができよう。しかもそれぞれの分野において同博士独特の創見を發表し、最後まで(2, 3の修正はあっても)主張し続けておられたことは驚くべきことである。福音書のアラム語原本説は最も力を入れた研究であったと推察されるが、それについては詳細にわたって提出された諸例をまず検討し、同時に全体の方法論的評価をすることが必要であろう。それらはなお今後の研究者に残されている任務である。